

平成30年6月15日
教育委員会生涯学習部
学校地域協働推進担当

第1回 第4次京都市子ども読書活動推進計画策定会議

<日時・会場>

平成30年6月15日（金）10：00～12：00
京都市教育相談総合センター 1階会議室

<参加者>

在田 正秀（京都市教育長）、岩崎 れい（京都ノートルダム女子大学教授）、
和田 弥恵子（市民公募委員）、下村 美友（市民公募委員）、
犬石 吉洋（京都府書店商業組合理事長）、
鈴木 美和（京都市子ども文庫連絡会代表）、
松本 久美（京都市PTA連絡協議会常任理事）、
池田 岩太（京都市保育園連盟常任理事）
川村 美津子（西陣中央小学校長）、竹田 昌弘（京都市立西京高等学校長）、
上田 廣久（子ども若者はぐくみ局子ども若者未来部長）、
清水 康一（教育委員会指導部担当部長）、春田 寛（教育委員会生涯学習部長）、
向井 宏明（教育委員会生涯学習部担当部長） 等

<発言内容>

○第3計画の概要について

川村：低学年に読書ノートを作ったこともあり、読む量は増えている。しかし、その質については課題があるように思う。ビブリオバトルを通して学級内でも波及し、読む本の質があがった。友達同士の声かけ等によりお互い刺激しあいよい作用がうまれている。

鈴木：低学年への読書ノートはページ数を稼ぐため短いものをたくさん読んだりすることもあった。発達に応じて量より質の向上が大切だと考える。学校司書の配置について1校に対して何日司書がおられるのかなどお伺いしたい。

清水：学校司書の配置については、これまでは週2日が多かったが、週3日で15時間ということで順次すすめている。

犬石：売る側の人間としては相対的に中学生向けの本が少ない。この年齢になってくると読書力のある子は大人の本も読みだす。京都情報BOXには読書履歴が見ることができるようになっていて、データの蓄積がある。それをもとに好みやレベルに応じて本の紹介も可能なのではないかと思う。（個人情報観点から問題もあるが）

竹田：中学生から読む喜びを知っている子は自然とすすめなくとも読んでいる。強いられて読むのではなく、研究・勉強（受験対策）で読まねばならないから読む子どもも存在する。読む喜びを知らなければ本当の読書は進まない。大事なのは主体的に読むこと、それに向けた仕掛けづくりが必要。先程もおっしゃっておられたように読書履歴からこんな本はどうかと個人に応じたすすめ方等なにか利用活用する方法もあるかもしれない。小さい頃から読む訓練をしておかないとそのまま読まないままで終わってしまう。

和田：100冊目標を設定することにより、冊数を稼ぐため短め・簡単な本を選択する子もいる。本の質が問題だと思う。ビブリオバトルを通じ、友達同士教え合うなどは効果が大きい。刺激を受けて様々な本に興味が及ぶ子も増えている。

川村：小中高ともに学校司書教諭をどんどん増やしている。12学級以上ある学校は司書教諭資格を持つ人をおくきまりとなっている。

○第4次計画の概要について

松本：「読書が好き」との質問に対し、「あてはまる」と回答した子どもは小・中とも全国平均を下回った。なぜか？

清水：都会と地方ではスポーツや塾等、様々条件が異なるので全国平均と比べる事が難しい。学力との兼ね合いによる分析も必要かと思われる。本を読めば読むほど学力向上になるのかといえば一概にそうとも言えない。

川村：読書習慣について、子どもはいい本に出合えば次も読むようになる。そんなよい環境を作ってあげることが大切だと思う。またたくさん読む中でよい本との出会いもある。

竹田：高校生ともなると読む媒体がスマホ等SNSなど多義にわたる。都会の子どもはそれぞれ忙しい。その分析も必要だ。

下村：小・中学校では読む機会を与えられていたが、高校ともなると読書に時間をさけなかった。

和田：娘も小・中学校あたりは「朝読書」があったが、高校ではなくなっていた。各学校でも違うようだ。

竹田：市立高校で「朝読書」を実施しているところはないように思う。高校では朝の10分間は生徒や教師とのコミュニケーションに使っているよう

だ。

上田：子どもは発達段階がちがう。乳幼児健診の際、親子のつながり・ふれあいのために絵本に親しんでもらうにしている。読書は遊び・宿題・体験等いろんな活動を通して浸透していくと考える。高校生ともなると読書以外での活動種類が増えていくが、なんらかの方法で本についてすすめていけるとよいと思う。

池田：子どもが本を読みたいと思った時、すぐ対応できる体制があればいい。意欲を持って読書に向かえるよう紹介ができればよい。映画・ゲーム・アニメ等媒体がいろいろあるがそこから派生して原作本にまで手が届くように紹介するとか。今は情報が多すぎてどれを選択したらよいかわかりにくい。情報の中で、そのひとつである本の位置が相対的に低くなり、「本」をわざわざ選択するということが減ってしまった。息子も受験で本を楽しんで読むということができない状況である。その中でどうしていくかを考えていく必要がある。

○アンケートについて

岩崎：設問1 あなたの性別はなんですか？女・男・その他とあるが、適切な設問方法かどうかお聞かせねがいたい。

川村：配慮が必要かと思うが、小学生には「その他」はわかりづらいかもしれない。

池田：アンケートで男女をきく意味とはなにか？

下山：これまでも同じ設問で、調査しているため。しかし、設問に検討する余地はある。本当にこの設問が必要なのか、ステレオタイプに分けないようにするなど。

岩崎：ただし指導や対応のしかたに男女の差があるとも思う。

和田：設問3 2・3 3 「外で遊ぶ」という選択があるが、少し幅がありすぎる気がする。

竹田：学童クラブはどちらに入るのだろうか。学童クラブではその中で自由に遊ぶことや、本を読む、外で遊ぶ、内で遊ぶなどいろいろ含まれる要素がある。設問冒頭に「学校がおわってからのこと」とあるがどのような範囲にすべきか、判断に迷う。

春田：「家庭で」「帰宅後」「学童がおわって」「学校のカリキュラム以外で」「学

校に行かない日」などにおきかえてみるのもいいかと思う。

上田：話が前後するが、携帯恋愛小説を読んでいる女子生徒がいる。傾向をみるためにはこういうこともあるので、性別を聞く設問もあっていいのではないかと思う。

岩崎：回答選択で「やや読んだ」「あまり読まなかった」の違いがわかりづらかった。

鈴木：高校生用アンケートで、冒頭 「小説の定義」についておうかがいしたい。マンガや雑誌～は含みませんとあるがなぜか？また、メディアミクスされたようなものは選択しづらいと思う。

竹田：本の定義については、高校生向けに少し変えてもよいと思う。設問3については、人数の少ない学科については答えると個人が特定されやすいかもしれない。

岩崎：このあたりについては再度検討していただき事務局にまかせます。

和田：設問10について。回答にかなりの選択肢はあるのだが、たとえば「本は読まないがマンガなら読むのにな」という子どももいるのではないかと思う。

鈴木：設問10は「読書に関すること」と「生活に関すること」がまぜこぜになっている気がする。

河合：こちらで再度検討する。

池田：話をもどしますが、本の定義について。マンガはふくまれていないが、国としてはマンガやアニメも文化として推進している。京都には精華大学にマンガ学科があり、またマンガミュージアムもある。その点はどのようにお考えか。

岩崎：雑誌にも文字中心なもの、ファッション等写真中心なものなどで分けて定義からはずしているものもある。どうしたら役立つアンケート内容になるのか再度検討いきたい。